

## 青年期における自立に関する一考察

G.A.Kelly のレパートリー・テストを用いて

米田 麻由子\* ・ 金丸 隆太\*\*

(2007年9月28日受理)

A Study of "Jiritsu" in Adolescence by Using the Repertory test.

Mayuko YONETA and Ryuta KANEMARU

キーワード：自立，青年期，パーソナル・コンストラクト・セオリー，レパートリー・テスト，質的心理学

本研究は青年期における自立をテーマとして，Kelly, G.A. (1955) が提唱したレパートリー・テストを質的研究の1つの方法として使用，自立の概念を探り，得られた自立についての構成概念(以下，コンストラクト)から自立のモデルを示すことを目的とした．方法として，青年期の社会人を含む男女3名の計9名をスノーボールサンプリングで抽出し，長江(2005)を参考に作成したレパートリー・テストに回答して貰った．更に得られたコンストラクトについて質問し，より中核的なコンストラクトを掘り下げた．以上から得られた結果から協力者9名のコンストラクトの特徴を掴むため探索的因子分析(重み付けのない最小二乗法，プロマックス回転)を行った．更に各々の因子構造と面接記録を元に，やまだ(2002)のモデル構成的現場心理学の方法論を参考に水準の異なる3つのモデル(「基本要素」，「基本構図」，「基本枠組」)を構成した．その結果，各々の協力者の考える「自立」イメージが反映された「基本要素」，また，「基本構図」として「鏡でできた螺旋階段」を構成した．これはモデルとモデルを媒介するモデルである．更に，「基本枠組」としてモデルの要素をまとめた「航海」のモデルを構成した．本研究は「自立」概念を実証的にモデルとして示した点で意義があると思われる．また，本研究におけるモデル「航海」は臨床的面接場面において「自立」について考えるクライアントへの査定ツールとして利用可能であろう．

### 1. はじめに

青年期とは，子どもから大人になるための準備段階である．一般的に，この時期については「心理的離乳」とか「脱衛星化」などと言った言葉で表されるように，親への依存からの脱却を求められ，一人前の人間として社会へと巣立っていくことが期待される．そういった点において，青年期とは自立において不可欠な時期として捉えられている．

\*社会福祉法人慶育会茨城育成園

\*\*茨城大学大学院教育学研究科

しかし、青年において自立するということはとても悩ましい問題である。青年期とは、石田(1990)によれば、‘人生の中でまず最初の葛藤の年代’であるという。つまり、‘独立しようとする欲求と親に保護されていることで気持ちの安らく依存との葛藤、自分には力があると信ずる自己肯定の気持と、反対にみじめな小さい、弱々しい自分しか感じられない自己否定の気持ちの葛藤、生きている歓喜と、生きていかねばならない不安との葛藤’といったさまざまな葛藤を抱える時期であるという。こういった青年期の自立についての主張は昔からあるものであろう。

ところが、自立の概念については理論的な視点からの研究はなされているが、質的な検討においては吉本(1984)等の自由記述を基にした研究が見られるものの、あまりなされてこなかったようだ。これは、自立概念の理論的な素地があるにも関わらず、その自立の概念を説明する理論が実際の青年の捉えている自立の枠組として、適しているかどうかについては議論がなされていないといえるだろう(高坂・戸田,2005)。これからの自立概念に関する研究は理論的な枠組を活かし、その理論を面接法や自由記述法等の質的なデータから見直すという実証的な検討が必要となるだろう。よって、本研究では青年期における自立をテーマとして、Kelly,G.A.(1955)が提唱したレポーター・テストを質的研究の1つの方法として使用し、自立の概念を探り、得られた自立についての構成概念(以下、コンストラクト)から自立のモデルを示すことを目的とする。また、レポーター・テストを実際の臨床的面接の場面に使用することによって、どのような意義や改善点が見いだされるのかといったことについても言及したい。

## 2. 先行研究

### 2-1. 自立に関する先行研究

自立について語られる際、その自立についての定義は研究者によってさまざまになされている。これはどういうことであろうか。福島(1997)は、この現象について、自立は‘使用する人や使用のされ方・その対象によって意味内容が微妙に異なっている’と言及しており、更に自立概念については、自立と自律、独立といった言葉と共に混同されて使用されてきたために、曖昧さを含んだ概念として今日まで来てしまっていると指摘している。また、高坂・戸田(2005a)も同様に、‘自立という用語が日常生活で頻繁に用いられており、その意味する内容がその場の文脈に応じて微妙に使い分けられてきたために、概念としてあいまい’となってしまうと指摘している。自立の定義として、久世(1980)は、自立を発達の観点から捉えており、身体的、行動的、精神的、経済的の4つの側面から定義している。この4つの側面は、身体的、行動的自立については幼児期における基本的な生活習慣の獲得が主要な問題となっており、精神的、経済的自立については、青年期を迎えてからの問題となるとしている。つまり、身体的、行動的自立を基礎として、青年は親からの精神的な分離を図りつつも、経済的に自立するための準備をし、常識を身に付けることが求められるということである。

また、上子(1982)は、自立を行動、決定、価値、情動の4つに定義づけし、分類している。行動の自立については、人が他者の助けを借りることなく、自らの力だけで行動するということである。この行動の自立には経済的な自立という視点も含まれているという。また、決定の自立については、自分で物事を判断して、その判断に従って決定することができるということである。さらに、

価値の自立については、自ら、物事の何が望ましいのを見極めることができることである。また、情動の自立については、他者による愛情や支持が示されなくても、心の安定を保っていることができることである。

以上のことから、「自立」という言葉は、あたかも「依存」と対立する概念のような印象を得ることもあるだろう。しかし、「自立」と「依存」は必ずしも対立するものではないという。福島(1992)は、主に女性は、親や友人といった他者との関係性の確立については男性よりも優れていることを示し、女性において自立と依存が共存していることを指摘した。このことは、「自立」と「依存」はあくまで対立概念なのではなく、他者との依存関係を体験することで、自立が促進されていくことを示唆しているのである。自立において、ただ単に独り立ちして、自らの力だけで行動し、判断するといったことについてのみを論ずるのはナンセンスであり、人間関係を抜きにして考えることは不可能のようである。このことは、永江(2000)の自己中心的な心性を有する現代の若者 ゆらぎ人間に対して、他者との共感性を獲得していくことが自立していく上で重要であるといった記述からも窺うことができる。

更に、高坂・戸田(2003)は、自立の定義として行動的自立・価値的自立・情緒的自立・認知的自立として4つの定義づけを行っている。それぞれ、「自らの意志で決定した行動を、自分の力で実行し、その結果の責任を取ることができるようになること(実行と責任)」「行動・思考の指針となる価値基準を明確に持ち、それにしたがって物事の善悪、行動の方針などの判断を下すことができるようになること(価値観と判断)」「他者との心の交流をもつとともに、感情のコントロールができ、常に心の安定を保つことができるようになること(自己統制と適切な対人関係)」「現在の自分をありのままに認めるとともに、他者の行動、思考、立場および外的事象を客観的に理解・把握することができるようになること(自己認知と社会的知識・視野)」。なお、外的事象に関する知識を得ることもこれに含むこととする。といった内容である。こういった定義を元に、高坂・戸田(2006)においては、「価値判断・実行」「自己統制・客観視」「現在把握・将来志向」「適切な対人関係」「社会的知識・視野」といった5つの下位尺度を有する心理的自立尺度(Psychological *Jiristu* Scale; PJS)を作成、その後の研究においても改訂を続け、5下位尺度に「責任」という下位尺度を加えた心理的自立尺度第2版(Psychological *Jiristu* Scale; PJS-2)を作成している(高坂・戸田,2005)。

また、実証的研究としては吉本(1984)の自由記述を使用した研究を挙げることができる。自由記述において、吉本(1984)は、自立している人間の条件において、何が自立にとって条件となるのか、について質問し、収集した。更にその自由記述を因子分析し、「パーソナリティ」「社会的自我の確立」「外面的堅実さ」「分離 独立 孤高」といった5因子を抽出した。

更に、福島(1992)も同様に、自由記述を用いて「自立した人はどのような人だと思うか」「自立していると思われる人」を1人具体的に思い浮かべてもらい、その特性について回答を求めている。その結果、自立の特性を「精神的自立」と「社会的自立」という2つの側面にて捉え、それぞれ精神的自立尺度、社会的自立尺度の作成を行った。結果として、精神的自立尺度には「主体的自己」「判断・責任性」「親からの心理的分離」「親との信頼関係」といった4因子が見られた。また、社会的自立尺度としては「協調性・社会的能動性」「友人関係の確立」といった2因子が見られた。

また、上述した「自立」と「自律」の概念の混同については、神谷(1997)の自立の概念規定についての研究が挙げられる。神谷(1997)は、independence と autonomy との関係について以下の

ように言及している。欧米の諸研究において、'autonomy を independence と同義に考える場合と independence を autonomy の下位要素として考える場合'があるという。さらに autonomy に関しては' autonomy は relatedness と対立概念である場合や, autonomy が relatedness の中に含まれている場合'など、欧米においても多種多様な使われ方をしていることについて言及している。そのことが、日本語への翻訳の際に混乱を生じているとして、欧米における“autonomy”の概念と日本における「自立」の概念には、曖昧な関係が存在していると述べている。つまり、'日本での「自立」とかなり似通った意味合いで使用されている英語は“autonomy”のようである。ところがこの autonomy の日本語訳は「自律」であって、「自立」ではない。'と言う。すなわち、日本において、「自立」と言うとき、一般に independence が用いられており、autonomy を用いることは少ないのである。さらに神谷(1997)は'日本での言語感覚からすれば、人間の成長において、まず自己の身体的な行動の統制、制御が可能になること、さらに心理的、社会的に対他者との関係においてもトラブルなく自己の行動を統制できるようになること'が、'自律から自立への発達の移行'を促進するとしている。よって、欧米の autonomy と「自立」の概念が一致するようであり一致しないものであると結論付けている。また、神谷は'欧米での independence の概念が日本での自立を十分に説明しつくしているとは言い難い'とも指摘し、日本における自立の概念は、日本人の特性にあったものとして、*Jiristu* といった概念があっても良いのではないかということについても提案している。以上のことから、自立という概念についての理論的な研究は、上記で紹介したもの以外にも多くなされて来ており、枚挙に遑がない。しかし、そういった理論的な視点からの研究がなされてはいるものの、自立の概念は一様ではない。一方、質的な検討については、吉本(1984)、福島(1992)が行った自由記述を基にした研究は見つけることができたものの、あまりなされてこなかったようである。このことは、自立概念の理論的な素地があるにもかかわらず、その自立の概念を説明する理論が実際の青年の捉えている自立の枠組として、適しているのかどうかということについては議論がなされていないということである(高坂・戸田, 2005a)。これからの自立概念についての研究においては、理論的な枠組を活かし、その理論を例えば、面接法や自由記述法などの質的なデータから見直すという実証的な検討が必要となるだろう。

## 2-2. G.A.Kelly の個人的構成概念理論 (PCT) とレパトリー・テスト

G.A.Kelly (1955) の個人的構成概念理論 (PCT: Personal Construct Theory) は、パーソナリティ研究における認知論的な立場を提示した研究として評価されてきたが(杉山, 1999)、近年は質的心理学の一分野として再評価されている(Tindall, 1994)。

G.A.Kelly の理論は構成的選択論(constructive alternativism)という相対主義的な哲学的立場に基づいている(藤原, 1973)。構成的選択論とは、世界には客観的な現実、そして絶対的真実は存在しないということを意味している。Kelly は、この構成的選択論を前提として、'すべての人は科学者である(man-the-scientist)'と考えた。科学者とは、'世界を予言し、支配しようとする存在'であるという(藤原 1973, 1974)。全ての人間が、そういった科学者と同様の機能を有しているのである。Kelly (1955) が'人生のような展開している事象に、どうして絶対的確定性なるものが存在しうるであろうか'と記述するように、世界は常に不確定さを伴うものである。しかし、人間はその世界の中でこれから起こる事象を能動的に予測、構成し、そこに意味を作り出そうとする。その

ために仮説を生成し、現実を解釈していくのである。

この一連の過程を繰り返すことを通して、現実を解釈するのに、更により適切な解釈の枠組みつまり、構成概念（コンストラクト）が見つかり、それ以前の仮説は随時修正、破棄されて、更新されていく。この枠組みは、事象間の「あるものとあるものが似ている」という類似性と「あるものとあるものに違いがある」という対比性といった二分法的構成概念によって解釈され、システムとして組織されていく。そして構成概念間の階層的構造が構成されていく。そうして出来上がっていくものが、「個人のパーソナリティ＝個人の構成概念のシステム」であり、個人が使用する構成概念がその個人の外界を決定する。以上が個人的構成概念理論（PCT）の考え方であり、この個人の構成概念システムの理解のために考案されたのがレパトリー・テストであった。

若林（1992）によれば、「Kellyは、被験者が自分の構成概念を使用することができるという点では、投影法検査を認めていたが、検査自体の特徴には無関心であった。つまり、ロールシャッハ・テストを例にとれば、インクの上を解釈する方法は人間を解釈する方法とほとんど関係がない」と考えていたという。そういった中でKellyは、より人間が関心を持つ現象に沿った評定法を求めて、自らレパトリー・テストを考案したという。このことから、レパトリー・テストは、KellyのPCTを基にして生まれ、個人の構成概念（＝コンストラクト）を明らかにするために作られたものであったことがわかる。様々な心理学的研究手法の中でも、このレパトリー・テストは特に「個人差」そのものに焦点を当て、考察をするのに向いている手法だと言える。

### 3. 研究

以上の先行研究から、「自立」という概念については、さまざまな研究が行われているにもかかわらず、明確な定義がされてこなかったことがわかる（高坂・戸田，2005）。また、多くの研究は質問紙調査が主であり、質的な検討を扱った研究は少ないようである。それは偏に「自立」という言葉が、多種多様な意味合いで用いられてきた結果により、個人によって自立の捉え方の違いが大きくなりすぎてしまったからではないだろうか。このようなことから、「自立」についての捉え方の個人差を真正面から分析する研究概念が必要になるのではないかと考えられる。

目的：青年期における自立をテーマとして、G.A.Kelly（1955）が提唱したレパトリー・テストを質的研究の1つの方法として使用し、自立の概念を探り、得られた自立についてのコンストラクトから、自立に関するモデルを示すことを目的とする。また、レパトリー・テストを実際の臨床的面接の場面に使用することによって、どのような意義や改善点が見いだされるのかといったことについても言及したい。

手続き：長江（2005）の用いたレパトリー・テストを元に、新たにエレメントに「自立している人」「自立していない人」の項目を加えたコンストラクト10×エレメント7のレパトリー・テストを使用し、半構造化面接を行った。所要時間はおよそ120分～150分であった。今回の面接においては、若林（1992）の指摘から、協力者の自由なコンストラクト生成を促すため、レパトリー・テストを行う際にコンストラクトを制限することはしなかった。また、抽出されたコンストラクト～までの説明が終わった段階で、「改めて自立を考える上で、～の中で重要だと思うも

のはどれですか？何個でも良いのであげてください。」と教示した。その上で、選択されたコンストラクトについてラダリング法（コンストラクトの内容に沿って階段を下るように質問し、さらに中核的なコンストラクトについて掘り下げていく面接手法）を用いて詳しく質問をした。

実施時期：9月下旬～11月

#### 4. 結果と考察

##### 4-1. 因子分析による探索的分析

レポートリー・テストから得られた結果を元に、研究協力者9名(A～I)の各々のコンストラクトの特徴を掴むため、探索的因子分析を行った（重み付けのない最小二乗法、プロマックス回転）。その結果、ほぼ全ての協力者のコンストラクトは3因子構造を有していた。

以下に例として協力者Aの探索的因子分析結果を提示する（Table1）。

Table1. 協力者Aのコンストラクトの因子分析結果・3因子  
（重み付けのない最小二乗法・プロマックス回転）

第 因子：受け身な学生生活			
経済力がない-経済力がある	.92	.09	.24
就業経験がある-就業経験がない	-.91	.24	-.08
口数少ない-よくしゃべる	.75	-.18	-.36
規則正しい生活をしている-生活が不規則	-.59	-.22	-.05
第 因子：自己実現する社会人			
移動は交通機関-移動は自家用車	.01	1.00	.12
地方居住-都会居住	-.06	-.95	-.07
目標が定まっている-強い目標がない	-.15	.53	-.23
第 因子：家から出たい			
外へ出るのを好む-家にいるのを好む	.08	.31	.94
一人暮らしの経験がない-一人暮らしの経験がある	.26	-.22	.76
酒を好む-酒はあまり飲まない	.45	.36	-.67
因子間相関			
	1.00	-.20	.16
		1.00	-.26
			1.00

協力者Aの因子分析結果において、第1因子には、「経済力がない」「就業経験がない」「口数少ない」「生活が不規則」といった項目が含まれている。Aの面接記録からは、「お金が稼げる仕事」に就いているか否かについてや、「生活が不規則」については「…学生的な生活。毎日何時に出勤、終わる時間も日によって変わる。」「規則正しい生活でありたいと思う。自分は朝弱いし、早起き苦手だし。」といった記述があった。また、A自身は自らを「自分が話せるほうじゃない」とか「口数の少ない人と（会話が）あたってしまったときに聞き手に回っているだけだと沈黙が…自分も話題を頑張ってふるけど、困る。」と捉えている。このため、第1因子は「受け身な学生生活」と命名した。

第2因子には「移動は交通機関」「都会居住」「目標が定まっている」の3項目が含まれており、それぞれの項目に対して「仕事とやりたいことを一致させている。」ということと、社会人のライフスタイルについてを語っており、第2因子を「自己実現する社会人」とした。

第3因子は「外へ出るのを好む」「一人暮らしの経験がない」「酒はあまり飲まない」という項目があり、「一人暮らしだと、自分で生活しているので、何にどれだけかかって生活しているという自覚がある」「（一人暮らしを）体験してみないとわからない部分がある。」「じっとしていると気が病む。落ち着かない」「飲み会に参加しない限り、飲まない。一人で飲むのはありえない。」「寝床確保

で飲む！年に数回・10回行くか行かないかの頻度で飲む。’ということから，外出や友人との時間を過ごすことに重きを置いており，さらに一人で暮らすことへの意欲が感じられることから，第3因子を「家から出たい」と命名した。

以上の協力者Aのように、探索的因子分析を行うことによってレパトリー・テストから得られたコンストラクトの特徴を掴むことが出来た。

#### 4-2. やまだ(2002)の提案による質的分析

やまだ(2002)は、現場心理学において、質的データからモデルを構成する方法論について、モデル構成プロセスを考察した。やまだ(2002)はモデルという言葉について、“関連のある現象を包括的にまとめ、そこに一つのイメージを与えるようなシステム”といった印東(1973)の定義を引用した。その上でやまだ(2002)はモデル化は一般的に以下の3つの機能を持つとした。モデル化の1つ目の機能には、“個々の多様な事象を包含しまとめて記述する知活動の集積庫や図鑑を提供すること”，2つ目には、“個々の事象を一般化したり類型化したりものさしとなる基準を作る認識の枠組を提供すること”である。3つ目として、モデル化によって、“個々の事象を見る見方が変わり、新たな仮説や実証を発展的に生み出していく生成的な機能を持つこと”であるという。

特に、やまだ(2002)は3つ目の機能については特に重要であり、モデルは、新たな見方を生成的に切り開いていくことが望ましいと主張している。また、やまだ(2002)はモデルについて、“構成されるものであり、構成主体は研究者である。現実を記述したり説明するための地図の一つとしてモデルがある”と述べた。つまり、モデルは様々な形式を用いて様々な描くことができ、それぞれの目的如何によっては、異なるモデルが構成されうるとした。

モデル構成的現場心理学の方法論においては、“多種多様な現場のデータからボトム・アップで、より一般化可能な水準のモデルを構成することを目的”とするとしている。しかし、モデル構成はいつも現場の生データからボトム・アップで構成されるとは限らないという。つまり、対象とするものによっては、理論や理念などからトップ・ダウンで構成されることもある。このボトム・アップによるモデル構成とトップ・ダウンによるモデル構成の両者が複雑に交互に行き来しながらモデルは構成されていく。更に、出来上がったモデルは最終生産物ではなく、そのモデルが実証的データの分析に向かう途中の段階において必要とされることもあれば、より一般的な高次のモデル構成に向かう際に必要とされる場合もあるとしている。

では、以上のことを踏まえたうえで、質的データからどのようにモデルを構成していくのか。やまだ(2002)は、質的データを現場データと位置づけ、「基本要素」「基本構図」「基本枠組」と名付けた水準の異なる3つのモデルを構成した。

上記の3つのモデル構成において、「基本要素」は、具体的イメージから、その基本要素を取り出してまとめたものであり、ローデータを直に反映したモデルであるという。やまだ(2001)は『基本要素は次の基本構図を作るときの構成要素となる場合と、基本要素のみをカテゴリー化し定義・分類して実証的データ分析に用いられる場合がある』としている。

また、「基本構図」は、関連する基本イメージを包括的にまとめ、ひとまとまりのイメージを与えるモデルであるという。やまだ(2002)によれば“基本構図は、基本要素の配置(arrangement)や構成(construction)によって成る「配置形態」(各要素の相対的配列・configuration)を表し”

ており、基本構図は「地図」のような役割を持つという。

加えて、「基本枠組」は、“基本構図を位置づける座標系となる”という。基本枠組は抽象度が高く、基本構図を成立させる前提となる枠組、骨格、構造にあたるという。また、基本構図の描き方を決める額縁の役割をも担っている。

これらの3つのモデルは、モデル「基本構図」からモデル「基本枠組」に至るほど、抽象化の程度が高い。しかし抽象化の水準は、モデル構成の順序と一致するとは限らず、モデル

という順序で構成されることもあるとされている。以下に本研究においてモデルに相当する9名のモデル図 (Figure1~9) を示す。



Figure1. 協力者Aのモデル



Figure2. 協力者Bのモデル

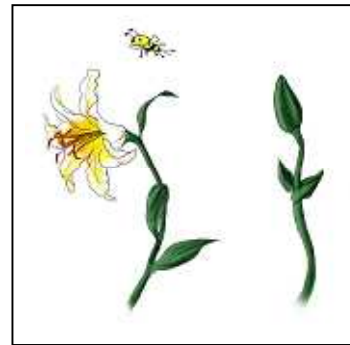


Figure3. 協力者Cのモデル

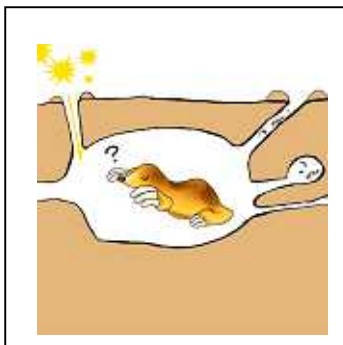


Figure4. 協力者Dのモデル

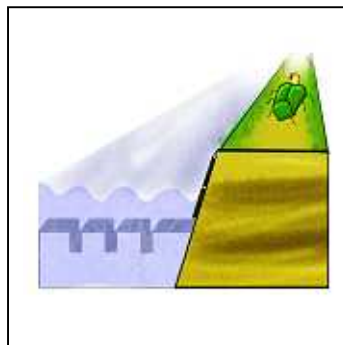


Figure5. 協力者Eのモデル

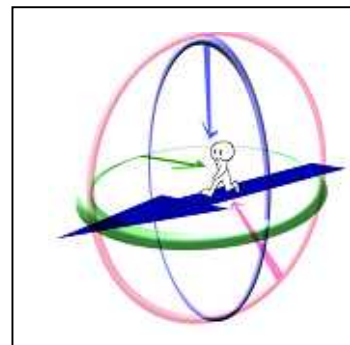


Figure6. 協力者Fのモデル

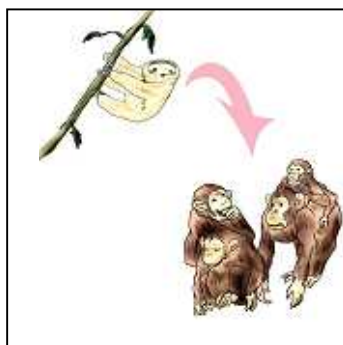


Figure7. 協力者Gのモデル



Figure8. 協力者Hのモデル

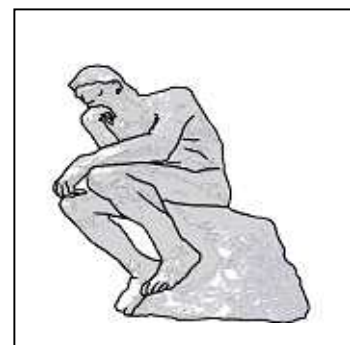


Figure9. 協力者Iのモデル



モデル「基本要素」は各々、「自己実現する社会人に憧れを抱くが、今の状況では叶わないことに葛藤するヤドカリ A」(Figure1)、「自立の象徴“侍”になりたいが、自らの甘えの象徴である“子ども”にとらわれている B」(Figure2)、「養分を吸い上げつつ、香りを発して虫に花粉を運んでもらう虫媒花のように必要なときに他者の力を借りたいと思う C」(Figure3)、「自分の世界の中で精一杯動き回って生きているが、器用に立ち回れないモグラ D」(Figure4)、「川の利水（堤防と堰の矯正によって川は形作られる）とその流れを眺める臆病なカメムシ E」(Figure5)、「様々な人たちと関わる世界＝周り＝和に囲まれ、その影響を自らに還元して自立を達成していこうとする F」(Figure6)、「同じ森の中でそれぞれが責任を果たしつつ生活するチンパンジーの群れを眺める、ナマケモノ G」(Figure7)、「自分を律することと周りの流れと調和することのコントロールをしたい H」(Figure8)、「自己を捉えなおし、身動きのできない自分に葛藤している考える人 I」(Figure9)のように、それぞれの協力者の考える「自立」イメージが反映されたものであった。続いて本研究においてモデルに相当する図(Figure10)を示す。

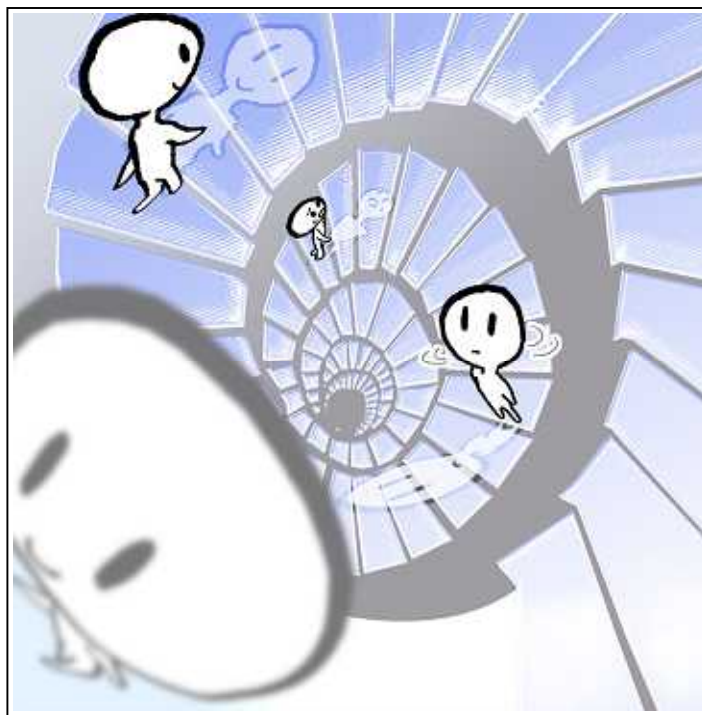


Figure10. モデル「鏡でできた螺旋階段」

モデル「基本構図」は「鏡でできた螺旋階段」であり、モデルとモデルを媒介するモデルである(Figure10)。モデルは自立へのプロセスを表している。「自分が映る鏡が常に目の前にある」ということが、このモデルの特徴である。常に鏡に自らの姿が映し出されるということは、嫌が応にも自分の目に自らの姿が飛び込んでくるということである。「自立」といった概念を考える際に、自立している人とはどんなものかと考える。その後、更に自らを振り返り、自立している他者の姿と自らを比較する事で、自らの姿が見えてくる。あたかも緩やかな螺旋階段を上る様に自立のプロセスが進んでいく。その過程で螺旋階段を「歩く人」が自らの目の前を歩く人や、ぼやけて

見える「自立している人」に憧れを抱いたり、後を行く人を見て、その人に「昔の自分」の姿を見て、優越感、嫌悪感といったものを抱く事があるかもしれない。

最後に、本研究においてモデル に相当する図を示す (Figure11)。



Figure11. モデル 「航海」

モデル は、協力者 A から I までの 9 名の「モデル 」の結果を反映させたモデルである。9 名の面接から表現された「自立の理論」を表すモデルである。これは「航海」となった。自立は、大海を航行することである。

「海」は協力者全体を通して言及されていた「周りとのコミュニケーション」を表している。「海」が穏やかであることは、「周り」の人々との意思疎通をはかることができることであり、「周り」との和やかなコミュニケーションをとることができるということである。また、「海」が荒れることは「周り」の状況や人々との関係で何らかの葛藤状態が表われることである。さらに、その「海」を航行するのが、「船」であるが、「船」は常に「海」の流れに流されている状態である。流されるままになってしまうと、「船」は行き先を見失ってしまうのである。「海」の影響力は、「船」にとってとても大きいものなのである。

このように「船」は「海」の波たちに影響を受けるが、「海」だけでなく「風」の影響をも受ける。「追い風」は「周りの人々からの援助や助力」を表している。以上のように、「海」や「風」などの外的な影響を受ける「船」は「精神状態」を象徴している。「海」や「風」の影響に対して揺れることなく安定した航行をすることができるということが「精神的安定」の象徴といえる。

さらに、安定した航行をするために必要なのが、「舵」である。これは「自己統制」を表している。常に「海」や「風」から船体への影響を受け続けている「船」にとって、「船」の進むべき進路へ向かい、方向やスピードを調節する役割を担っている「舵」は、なくてはならないものなのである。

また、「船」が航行する際に必要となるのは推進力である。「船」は「追い風」の影響を受けることができる「帆」を持っており、必要があれば「帆」を張って、「追い風」の影響を推進力として利用することができる。必要がなければ「帆」をたたんでしまうことも可能である。この「帆」は他者からの援助を受け入れることができる「受容」の象徴である。

さらに、「船」を安全に航行させるためには、これから先の航路に障害がないかといったことに対する「見通しを立てる力」が必要である。これは「見張り台」として表されている。「船」を運航するのは「船長」であるが、「船長」は「舵」を操作したり、「見張り台」に立ったり、「帆」を張ったりと忙しく動き回りつつ、状況を把握する「自己」である。「船長」が生きていくためには、「船」の後方に積み込まれた「食料」が必要である。「船長」は自ら「自活」の象徴である「釣竿」を振ったり、海釣りをしたり、港に下り立ったときに購入するなどの手段を用いて「食料」を手に入れることができる。これは「経済的スキル」の象徴である。また、「船」が進むべき進路に行くためには、「海図」が必要である。「海図」は「自立した自分のイメージ」を表しており、「船長」はこれを見て航海するのである。

さらに、「舵」の隣に設置された「無線電話」は、「依存」の象徴である。つまり、「海」や「追い風」の影響、内省の影響により、親や周囲の親密な他者への依存の気持ちが出てきた場合、いつでも「無線電話」を用いて「船長」自らが連絡を取ることで、相手の声を聞き、安心することができるのである。また、「無線電話」は自らが連絡をするためだけのツールではなく、相手からの連絡を受けることもできる。しかし、その電話を取るのも取らないのも、「船長」自らが決定できる。つまり、「船長」が親との関係について考えたり、現在の「船」の進行方向、ゆれの状態などの様子を見ながら、「無線電話」をどう使用するかは、「船長」が有する「依存」をどのように適切に表していくのかにつながるのである。

「船長」はまた、「内省」することができる。「内省」することが、船の後方に浮かんだ、もう一人の自分である「見つめる人」にエネルギーとして「自立へのモチベーション」を与えるのである。「見つめる人」は、もう一人の自分である「船長」の乗る船を自ら後押しするために「推進力」として「風」を吹くのである。しかし、「船長」の乗る船は常に周りの「海」や「追い風」によって影響されている。「船」が不安定となることで、「船長」の内省が損なわれると、「見つめる人」へのエネルギー「自立へのモチベーション」が足りずに、船を動かすほどの「風」を吹くことができなくなることがある。あるいは「自立へのモチベーション」が高まりすぎることで、空回りして、見当違いのところまで風を吹くことで「船」の進行を妨げてしまうこともありうるのである。つまり、「内省」する「船長」＝「自己」と、「自己」が「内省」することによって力を与えられる、もう一人の自分「見つめる人」との間には相互関係が存在している。この「自己」と自らを「見つめる人」との相互関係が「自立」をより促進していくのである。

モデルの特徴は「自らの船を自らの力で後押しする」事である。モデルにおいて「自立」を促進するのは、自らに対して「自立へのモチベーション」の風を吹き出す「見つめる人」である。この「自立へのモチベーション」を供給するのは、「船」という「精神状態」を統括する「船長」、つまり「自己」である。「船長」が自身の「自立」について「コミュニケーション」の海を航海し、荒波にもまれつつも「内省」することで、その影響が「見つめる人」のエネルギーとして反映される。このエネルギーを使い、「見つめる人」は自らの船を後押ししていくのだ。また、「見つめる人」

と「船長」の構図はモデルの「歩く人」と「自立している人」の関係と同じである。「歩く人」は「鏡でできた螺旋階段」を上りつつ、「自立している人」へ羨望の眼差しを送り、更に自らの姿を鏡に映し出して焦りを覚える。モデルにおける「見つめる人」は、この自立の「鏡でできた螺旋階段」を徐々に上っていくことで、「船」を後押しするための肺活量を鍛えるのである。そして「自立している人」が更に内省し、「自立していく」姿を見て、力を得るのである。更に、モデルにおいて「自立」を語る際に特に重要なのが、周りとの「コミュニケーション」である。モデルにおける「コミュニケーション」の象徴は「海」である。「船」は常に「海」の波に流され、何らかの対策を講じなければ自らの望む方向へ進むことは出来ない。「海」がしけたり、凪いだりする事で「自己統制」を行う「舵」が対応することが出来ない時、「船」は不安定な状態となる。対人関係において何らかの葛藤が起きた際、どのような解決策があるのかと考え至ることが出来なかった場合、精神的に不安定な状態へと陥ってしまうのだ。自立において他者との関係、つまりコミュニケーションというものは切っても切り離すことが出来ない。コミュニケーションの波の中を泳いでいけるだけの共感的な人間関係を築くことが出来る事が「自立」において重要なのだ。

#### 5. レポートリー・テストを臨床場面で使用する意義・改善点

本研究は、半構造化面接において Kelly, G.A. のレポートリー・テストを使用した。面接終了時に協力者 A~I に対して、本研究で行った面接についての感想を自由に語ってもらった。

レポートリー・テストを受けての感想については、協力者それぞれから「この3人の違いを分けてください」というのは、話が広すぎて難しい。」「深く知らない人の事を評価するのは難しかった。一言で書くのも難しかった。」「点数が逆転する可能性がある。良いことに上の点数をあげたくなる。」「後半のネタが尽きてきた。」「といった感想がみられた。これらの感想からレポートリー・テストの構造的な難解さが手伝い、初見でレポートリー・テストを受けるということは、とても難しいものであったことが推測される。これから臨床場面でレポートリー・テストが使用される際には、より丁寧な「答え方」のデモンストレーションを心がける、もしくは説明用のビデオを作るなどして、レポートリー・テストの回答の仕方を解りやすく伝えること、コンストラクト数を制限することで、協力者に答えやすいものにするということが挙げられるのではないだろうか。しかし、コンストラクト数を減らすことは、協力者の自由な発想を妨げることにもなりかねない。この点については、より多くの研究がなされることによって、見極められていくことが望ましいだろう。また、意義としては「言いにくい、言葉にならない感じのことがいっぱいあった。なんか面白かった。なかなかしゃべらないよ、こんなことって。」「といったように、面接に対して集中して取り組む協力者の姿を見ることが出来る。また、「書いた時点では、共通項を探していただけだけど、話すために脳みその中で整理して、ここ大切だった、と気づくことが出来た。」「6人の人に対してこう思っていた、ということにも気がついた。再認識できた。」「人と対面式でじっくりやったのが新鮮だった。個人的には話せるから気にならなかった。」「話を聞いてもらってよかった。」「といったように面接を通して、さらに自らのコンストラクトの中核部分を掘り下げていく体験について、協力者それぞれについて語られた。

レポートリー・テストの特徴は協力者それぞれがどのような視点から物事を捉えているのかが分

かりやすく提示されることである。本研究では、協力者それぞれが「自立」について思考を巡らし、それぞれのテーマに沿いながらも「自立」について語っていた。‘同じテーマについて語っている。’ “重い”と“責任感”，“明るい”と“軽い”の話。自分の劣等感と繋がっている。自分がほしいもの、自分がないものに繋がる。’ ‘自分の興味があったこと（川の話）がストーンとまとまった。’ ‘おもしろかった。自立について考えることが出来たし、他の人とどう接していくべきかを考え直すことも出来たし、あまり考えなかったことを考えるきっかけになったし、楽しかった。やって良かった。’ “自分をどう抑えるか”が大事ということを感じた。それができないと、自立できないような。調和は自分はやりやすい。負担はない。けど、自分を抑えるのは苦しい。律するのは難しいような気がする。’ ‘違う言葉を書いたつもりでも、言っていることは一緒で、気にしていることは一緒だった。自分が心配性、行動までに時間がかかる、というマイナスなことでも考え方によっては良い面もあるのかなと思った。’ といったように、それぞれの協力者はコンストラクトが明らかになり、ラダリング法を用いてコンストラクトを掘り下げていくという過程において、自身の「自立」についての新たに捉え直し、そして自らの持つテーマについての再解釈に至ったといえるだろう。

更に、レポートリー・テストを使用した面接に対する改善点についてである。協力者Dから‘深く聞かれることで、侵入される感じがあった。キツくなると逃げた部分もあるので、よくないなと思う。’ または‘探られている感じ。’ “自立について語る”ということをおぼろげに忘れた。不快・・・と言う感じがかった。’ といった感想が挙げられた。本研究では半構造化面接において、ラダリング法を用い、‘レポートリー・テストによって得られた下位コンストラクトについて質問して、内容に沿って階段を下るように、さらに中核的なコンストラクトについて掘り下げ’ ていった。Dの感想を受け、研究者自身がラダリング法を実際の面接場面に使用する際に訓練不足であったことは否めない。しかし、こういったラダリング法のようなスタイルは、Dのように「自立」といったテーマについて考えることで劣等感を刺激されてしまうといった場合には、よくよく吟味されて使用される必要があるようである。というのもラダリング法は、語られているテーマについて直面化することを求められるからである。実際の臨床場面で用いる際には、セラピストはクライアントの置かれた状況について勘案し、さらにクライアントが自身の抱えるテーマに関して、直面することが適切であると判断された場合など、セラピストが面接において時期を見極めて使用することが望ましいのではないだろうか。

レポートリー・テストを使用することにより、協力者それぞれがどのような視点から物事を捉えているのかが、協力者それぞれに対して視覚的に提示されることが解った。‘自立’における語りについても協力者それぞれのテーマが色濃く反映されていた。Kelly.G.A.は元来、レポートリー・テストを臨床場面で使用することを目的としていたが、本研究においても、実際の心理臨床場面においてこのようなレポートリー・テストという媒介を通して面接をすることは、意義のあることと思われた。また、改善点としては、クライアントの状況を見極める必要が常にあること、レポートリー・テストの回答方法が複雑なことが挙げられる。実際の臨床場面において用いられる際には、クライアントに対して、分かりやすく説明する必要があると同時に、テストに対するある程度の理解力が求められるだろう。これは、若林（1992）の指摘する‘Rep.テスト自体が被験者にかなりの知的水準を要求する’ ‘実際に深刻な精神障害をもつ被験者にRep.テストを実施する場合には、それなりの形式を考慮することが必要であると考えられる’ と述べていることと一致する。しかし、以上の

改善点については、何もレパートリー・テストに限ってはいえることではないだろう。テストを試行する際には、なぜこのテストをクライアントに用いるのか、といったことは常にセラピストがよくよく考慮しつつ用いなければならないことである。レパートリー・テストにおいても、セラピスト自身がその有用性を吟味し、使用されていくことが望まれる。

## 6. おわりに

本研究は Kelly のレパートリー・テストを用いて面接調査を行うことによって、「自立」の構成概念を探り、それをモデルとして提示したものである。「自立」概念についての実証的研究は今まであまり行われてきておらず、本研究において「自立」概念を質的に検討したことは、意義のあることであったと思われる。

しかし、レパートリー・テストを使用した面接では、研究者自身のレパートリー・テストへの不慣れさゆえに、効率よく面接場면을構成することが難しかった。そのため、面接時間が長くなってしまったことが問題点として挙げられる。

また、「自立」概念のモデル構成については、これからより多くの青年期の人々を対象としてデータを収集することで、新たなモデルを作成することが可能となる一方、今回得られたモデル 11 種をさらに洗練させていくことができると考えられる。

## 引用・参考文献

- Fransella, F., Bell, R. and Bannister, D. (2004) A Manual for Repertory Grid Technique Second Edition John Wiley & Sons, Ltd.
- 福島朋子 1992 思春期から成人にわたる心理的自立 自立尺度の作成及び発達の検討 『発達研究』 8, p.67-87
- 福島朋子 1997 成人における自立観：概念構造と性差・年齢差 『仙台白百合女子大学紀要』 創刊号, p.15-26, 仙台白百合女子大学。
- 藤原哲 1973 ジョージ・ケリイ研究(1) 哲学的立場(その1) 『埼玉大学紀要教育学部(教育科学)』 第22巻, p.1-8, 埼玉大学教育学部。
- 藤原哲 1974 個人的構成概念体系の因子論的分析法について 構成概念の関係強度を中心にして 『埼玉大学紀要教育学部(教育科学)』 第23巻, p.25-41, 埼玉大学教育学部。
- 藤原哲 1974 ジョージ・ケリイ研究(2) 哲学的立場(その2, 個人的構成概念理論の成立過程) 『埼玉大学紀要教育学部(教育科学)』 第23巻, p.43-56, 埼玉大学教育学部。
- 藤原哲 1976 ジョージ・ケリイ研究(3) 心理学における動機理論と人間性 『埼玉大学紀要教育学部(教育科学)』 第25巻, p.41-56, 埼玉大学教育学部。
- 石田一宏 1990 『青年の自立』 大月書店。
- 上子武次 1982 親は子どもの自立を育てているか 『児童心理』 36, p.55-65, 金子書房。
- Kelly, G.A. 1963 A Theory of Personality The Psychology of Personal Constructs. W·W·NORTON & COMPANY

- 神谷ゆかり 1997 自立の概念規定について “autonomy” の視点を中心に 『安田女子大学紀要』 25, p.105~113, 安田女子大学・安田女子短期大学.
- 高坂康雅・戸田弘二 2003 青年期における心理的自立( ) 「心理的自立」概念の検討 『北海道教育大学教育実践総合センター紀要』 4, p.135~144, 北海道教育大学教育学部附属教育実践総合センター.
- 高坂康雅・戸田弘二 2005b 青年期における心理的自立( ): 青年の心理的自立に及ぼす家族機能の影響 『北海道教育大学紀要教育科学編』 55(2), 北海道教育大学.
- 高坂康雅・戸田弘二 2005a 青年期における心理的自立( ): 心理的自立尺度の作成 『北海道教育大学紀要教育科学編』 56(2), 北海道教育大学.
- 高坂康雅・戸田弘二 2006 青年期における心理的自立( ): 心理的自立の発達の变化 『北海道教育大学紀要教育科学編』 57(1), 北海道教育大学.
- 久世敏夫・久世妙子 1980 『自立心を育てる』 有斐閣.
- 長江信和 2005 大学生のシャイネスに対する構成主義的な認知療法の効果とその要因 『早稲田大学大学院(未公刊)』
- 永江誠司 2000 青年期の自立にかかわる諸問題(6)思春期やせ症とボディ・イメージおよび女性性 『福岡教育大学紀要・第4分冊・教職科編』 49, p.239~246, 福岡教育大学.
- 永江誠司 2001 青年期の自立にかかわる諸問題(7)モラトリアム・シンドロームとゆらぎの心理 『福岡教育大学紀要・第4分冊・教職科編』 50, p.227~238, 福岡教育大学.
- 杉山憲司・堀毛一也 1999 『性格研究の技法』 福村出版.
- Tindall, C. 1994 Personal Construct Approach. In: Banister, P. *et al* (ed), *Qualitative Methods in Psychology*(Buckingham:Open University Press,1994), pp.72-91.
- 若林明雄 1992 George A.Kelly の個人的構成概念の心理学 パーソナル・コンストラクトの理論と評価 『心理学評論』 35(3), p.311-338, 心理学評論刊行会.
- 若林明雄 1995 パーソナリティ研究の動向と問題点 『教育心理学年報』 34, p.61-73, 日本教育心理学会.
- 若林明雄 1997 遺伝-環境問題とパーソナリティ:行動遺伝学的アプローチによるパーソナリティ研究の動向 『上越教育大学研究紀要』 16(2), p.403-419, 上越教育大学.
- 若林明雄 1998 子どもによるパーソナリティ特性の理解:帰属理論から心の理論へ 『上越教育大学研究紀要』 17(2), p.529-550, 上越教育大学.
- 若林明雄 1998 パーソナリティと記憶の関係についての基礎的検討:記憶過程における個人差研究の動向 『上越教育大学研究紀要』 18(1), p.25-45, 上越教育大学.
- やまだようこ 2000 『人生を物語る』 ミネルヴァ書房.
- やまだようこ 2002 現場心理学における質的データからのモデル構成プロセス 「この世とあの世」イメージ画の図像モデルを基に 『質的心理学研究』, 1, p.107-128, 新曜社.
- 吉本美紀 1984 青年期の自立に関する一考察 「自立」概念明確化の試み 『昭和薬科大学紀要』 19, p.31-42.